

はじめに

現在、様々なところで自然の破壊が進行している。自然景観の破壊もある部分では顕在的に、またある部分では潜在的に進行していることはいうまでもない。それは、一方では視覚的な意味でのいわゆる景観の破壊であり、他方では意識の全領域における空間的な秩序感の喪失という意味での空間および空間像の解体である。このような状況に対処するために、みればよいは、自然景観とは何か、それによって構成される空間とはどのようなものであるのか、それらの特質をできるかぎり系統的に明らかにする作業を進めつつある。今回は、自然景観の特質を明らかにする上で重要と思われる指標について、断面の許されるかぎりの説明を加えることにする。なお、この研究は昨年発表のIV-82「自然地形と景観」と一連のものというまでもない。自然地形による空間構成については、断面の都合上時を改めて発表しなければならぬ。

I. 自然景観の解析指標

自然景観の特質を解析把握する上で重要と思われる指標に次のようなものがある。

1. 可視不可視 自然地形のどこが見えてどこが見えないかを明らかにすること、景観(Landscape)に関するもっとも基本的な指標である。

2. 距離 視座から景観対象までの距離で、景観の見え方を大きく左右する指標である。

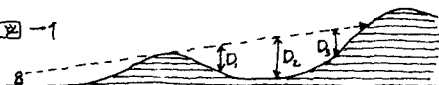
3. 視線入射角 景観対象面に入射する視線の角度で、対象面の見えやすさ、見えにくさにかかわる指標である。

4. 仰角 5. 俯角 とともに景観の眺望のタイプ(仰視眺望、俯視眺望)に依存し、景観および空間の基本的性質にかかわる指標である。

6. 奥行き性 景観の奥行き、深さについての指標である。

7. 不可視深度 不可視領域の不可視の長さを示す指標である。図-1におけるDが不可視深度である。

図-1



その他、8. 見出し歩速度 9. 日照による

陰陽度などがある。以下、これらの指標のうち、距離性と仰角について、説明を加えることにする。俯角、奥行き性については昨年発表した発表を参照されたい。

II. 距離性

1. 対象 日本の自然景観において卓越した視覚対象は森林樹木であるといえる。(生態的に森林は、日本におけるクワイエツワスの植生であり、もっとも安定した自然のすがたであるという。) 二では、距離性による森林樹木の見え方に問題を限定した。

2. 分析 直接的な観察と経験による定性的な分類と対象の識別距離性という観座からの指標の定量化について述べる。

(1) 定性的な分類

①. 近距離景 一本一本の樹木の葉、枝、幹などの特徴が視覚的に意味をもつ領域である。風の樹木に対する視覚的あるいは聴覚的影響を看取できる。自然としての森林樹木と一体感をもつ親密な景観、空間である。

②. 中距離景 個々の樹木のシルエットを

C. 遠距離感 もはや、個々の樹木のアートラインはとらえることができない。空気遠近法の影響が大きくなり、テクニクは写実的になり、地形のアートラインやスカイラインが強調され空よりあけい背景として中距離感を与えている。

2. 近距離量と中距離量の区分 一本の植体
木の形姿(山の斜面の場合は植体容)全体を視
覚で移動させることなく明瞭な視覚でとらえる
ことのできる距離は、すなわち植体角10°の観視
角でとらえられる距離性を両量を区分する定量
を目安とする。対象の大きさの約1/4倍の距離性
であるから、植体の大きさが8Mの照葉植体で
あれば、約450Mがその目安となる。

3. 図-3の事例についてコメント
 (1) 宮室 神武の在イスタンビメの歌や図-2
 の宮室跡が示すように、藤原宮以前の宮室は近距
 離景の自然空間にあった。平城・平安宮といえども
 数km離れたかたが10km内外の中距離景であ
 る。江戸・東京の富士・筑波への百km、70km
 は破格であった。

① 6世紀までの古窯
 □ 7世紀の古窯

0 1 2km

石水院
成就院
天竜寺 (比叡山)
金剛寺 (花笠山)
平等院 (比叡山)
麻安宮 (赤久山)
藤原宮 (藤原山)
藤原宮 (西成山)
藤原宮 (赤久山)
平安宮 (比叡山)
平安宮 (菅刈山)
平安宮 (比叡山)
平安宮 (生駒山)
平安宮 (豊田山)
又新神社の遺跡 (比叡山)
仙巖園
慈光院
正徳寺 (比叡山)
円通寺 (比叡山)
大徳寺 (比叡山)
江戸 (東山)
三ツ木 (菅刈山)

www 本村 6-8 km 比叡山 三ツ木の正徳寺の古刹

0 1 10 100
km km km km

(2)庭園 平等院、唐土寺等庭園前方の山は
近距離量と中距離量にまたがったところにある。
同種、異種の植物のこきまざった様子を眺めるホ
イットとなる距離をとりし（好例一、鎌倉橋か
ら北山）。江戸時代の借景庭は、中距離量の限
界の位置にあり、母土の気象と空気を遠近法と
が微妙にかかぬところを位置しているよう
である。李白らの標榜の量に比したらまだよほ
ど近いであろう。

(3)日本の空間の一つの特質として、遠くしては
かたか10KM内外という、自然との近さの感
覚を基調とした空間を描描できよう。江
戸の名所絵や庭園における、富士や筑波に
対する異常な偏重は、興味ある問題を提

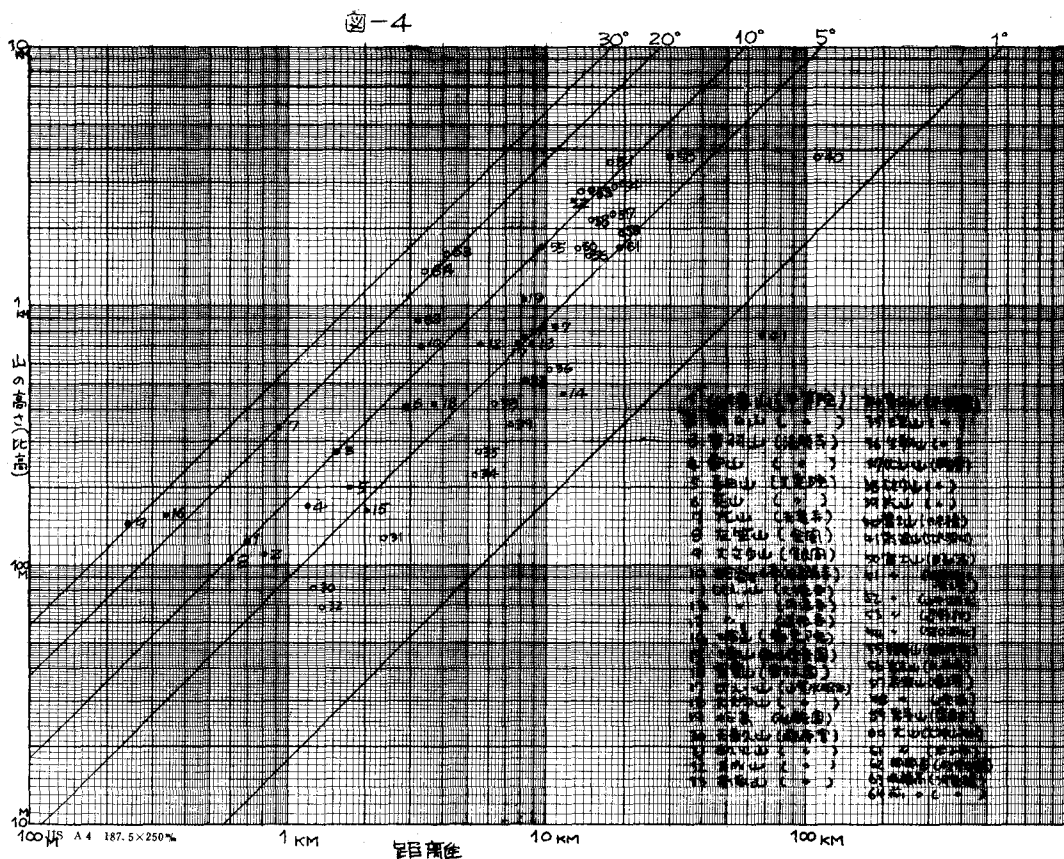
起している。

III 仰角

1. 対象 自然景観において、仰角という空
間的な視覚関係が存在し、その景観の性質を最
も強く規定している対象は、山である。こゝで
は、平地からのみとらる山の景観的特性を生
に仰角という指標により分析しその意味を明ら
かにしたい。

2. 分析

(1)現象分析 山を認識した、あるいはと
りこいた庭園からの山の仰角、著名な山の代
表的な眺望地帯からの仰角の測定値を
等角図表として図-4に示す。



庭園からのむね子山、代表的眺望地帯からの名山、それらの仰角はとくに 10° 内外である。 20° をこえているのは、古山(天竜寺)、大文宇山中腹(鉦田)、紫雲山(栗林園)、裾高連山(河童橋)である。経緯的スカイラインを対象とした借景庭や、都座からのむね子著名な山の仰角は 5° 以下である。

(2) マイクロレータによる実験の材料

① 目的 山の仰角が大きくなるにつれて、視線は山の中腹に集中し、山の仰角が大きくなるにつれて視線は集中するという経験的事実を、マイクロレータにより実証することを目的とする。

② 方法 現場実験は多くの困難があったため、カラスライドによる室内実験とした。対象は富士の外輪山、毛無山雨ヶ岳の仰角 24° 、 20° 、 16° 、 10° と筑波山の山の仰角 5° の五つである。被験者は、着座して5名、直立して5名の計10名。スライドは提示順序はランダム、提示時間は1枚のスライドにつき各人20秒とした。

③ 結果 直立した5名の結果を図-5に示す。視線を一幅の絵として見てしまったため、大きな仰角の山のスカイラインを見出し比率が高くなっている。しかしながら、山の仰角が大きくなるにつれてスカイラインを見出し比率が低下していく傾向はあらわれている。

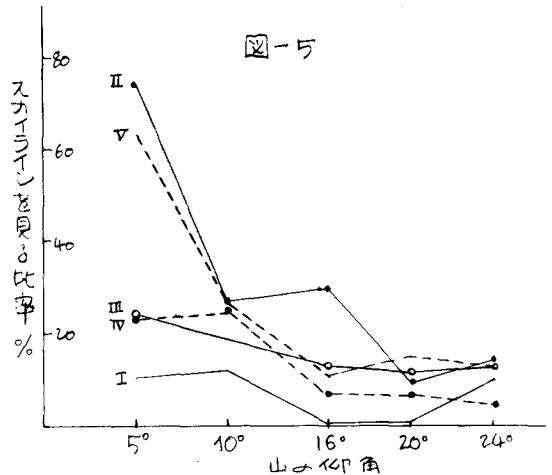
3. まとめ

(1) 仰角 5° 以下の山……スカイラインが視覚的に卓越した重要な性をもつ。つまり、それらの影響は山容となりスカイラインが強調された状態を一つの典型とする。(佐藤知夫の案)

(2) 仰角 10° 近辺の山……スカイラインばかりではなく山腹にも興味がもたれる。同図の風景とともに山容全体が視覚的に重要な性をもつ。庭園からのむね子山や平地

からのむね子日本のおけゆる名山がこれである。メルテンズの「眺望的」にたどり、「眺望的」ということがわかる。

(3) 仰角 20° 近辺の山……視覚的な眺望の対象は山腹にうつくる。視線としては山容全体を見越すことはできるが、やはり山容全体が一つの小さな世界として壁立的に立ちあらわれてくる。



III. 結論

2つの指標のみしかあらわれなかった。しかし、ともに基本的指標であるので、自然景観が定まってくるための目安を与えていると考える。とて、より多くの事例に接し、景観が見えていなければならない。そのうえで、はじめに設定した問題はあらわされてくる。最後に、鈴木忠義教授(東工大)、中村良夫講師、塩田敏志氏(工学部)、佐藤博紀君の御教示、御協力に謝意を表したい。

参考文献: 高橋實志「研究」『識別尺に因る研究』一日本建築学会論文報告集 昭44年10月、中村良一「森林風景と視覚」『国土公園』No.180 '64, H.メルテンズ「都市計画と視覚の標準」抄録 北村徳太郎, Burton Litton, Jr. 'Forest Landscape Description & Inventories' '68, 佐藤博紀「東工大工学部卒業論文」昭46